

夏休みも半分をすぎたある日、タカキは家の庭で一匹の天邪鬼をみつけた。

自由研究をなににしようか迷って、植物の観察日記でもつけようかと、庭を見回していたところだった。

「あんらめずらしい。あまのじゃくじゃないけ。このあたりにもまだいたんだなあ」

縁側でお茶を飲んでいたばあちゃんが、湯のみから湯気ただよわせながらそう言った。

あまのじゃくって言うのか。タカキはかがみこみ、そのちいさな鬼をよく見てみた。これは自由研究にいいかもしれない。みんながあつかわないような題材を選びましようって、富子先生も言っていた。

天邪鬼は池の水辺にのびてひくひくとしている。どうやら衰弱しているもよう。なにか食べ物が必要だ。タカキは冷蔵庫をのぞきこみ、なにかないかと物色した。とりあえず朝

ご飯の残りの玉子焼きと、シャケの切り身を失敬だ。

「それ、あまのじゃく。エサだぞ」

タカキは玉子焼きとシャケの切り身を差し出すのだけれど、天邪鬼はぷいと無視した。

これは食べないのかなと思って、またキッチンを物色する。食パンを一枚と、バナナを失敬。天邪鬼にやるのだけれど、天邪鬼はこれまた無視。一体なにを食べるんだろう？

ドッグフードに手をかけると、ペロがわうつとほえて抗議した。ごめんと謝りながらまた失敬。天邪鬼は完全無視。

「タカキ！ 食べ物で遊んじゃいけないっていつも言ってるでしょ！」

お母さんの雷が落ちた。

「……怒られちゃったじゃないか」

玉子焼きと、シャケの切り身と、食パンとバナナとドッグフードとポテトチップスとバナナアイスとお徳用力二缶に囲まれて、タカキはがつくり肩を落とすのだけれど、天邪鬼は知らん顔。

「食べたくないなら、べつにいいよ」

タカキが片付けようと手を伸ばすと、さっとその手から玉子焼きをさらう天邪鬼。シャケの切り身も食パンも、バナナもドッグフードもポテトチップスアイスカニ。一切合切手を伸ばし、もぐもぐ一氣にたいらげてしまうと、また知らんぷりして眠りだした。

タカキは二階の自分の部屋からノートをとってくると、表紙に『あまのじゃくの飼い方』とタイトルをつけた。

それから『エサのやり方』と章を作って、ちよつと考えてから書きこんだ。

『エサをやるうとしないこと』

「タカキ、ペロの散歩に行ってきた」

お母さんに言われ、タカキはペロを連れて外へ出た。

「あまのじゃくも元氣になったなら、散歩へ行こうよ」

タカキはそう言って誘うのだけれど、天邪鬼はひたすらだるそうに、後ろ手に手を振ってみせるだけ。

「しかたない。ぼくたちだけで行こう」

とペロに言って、タカキはくるりと背中を向ける。すると後ろからだだと一直線に、駆けてくる足音は天邪鬼のもの。

足下にペロと天邪鬼を従え、タカキはその場でノートを開くと、『散歩のしかた』と章を作って、考え考え書きこんだ。

『散歩をしようとしないうこと』

夏の日差しは気持ちがいい。タカキたちは公園まで来ると、フリスビー遊びをした。

ペロがキャッチしようとするのを、横から天邪鬼が取ってしまうので、ペロは不満げ。

天邪鬼は取ったフリスビーをなかなか返してくれない。『フリスビーの返してもらい方』の章は、『フリスビーを返してもらおうとしないこと』になった。

「おいあまのじゃく。順番を守ってよ。ペロは友達なんだから」

不満げなペロをなだめると、タカキは天邪鬼に向けて笑いかけた。

「仲良くやろうよ」

そう言ってタカキが手を差し出すと、天邪鬼は脱兎で逃走。あつという間にちいさな点

に。

「じゃあいいよ。仲良くしないでいい」

天邪鬼はダッシュで戻ってくると、伸ばしたタカキの手をとって握手。

タカキはノートを開くと、ペンを走らせた。

『仲良くなり方』と章を作って、ぴしりと一行、書きこんだ。

『仲良くなるうとしないこと』

そんなこんなで、夏休み明けの学校で、タカキは『あまのじゃくの飼い方』を自由研究の成果として提出した。なかなか面白い題材をみつけましたね、と富子先生はタカキを褒めた。

「先生も、来年、定年退職したら、故郷へ天邪鬼でも探しに行こうかしら」

富子先生は言った。

「でも、もうちょっとクラスのみんながまとまってくれないと、心配で定年もできないわね」

富子先生は吐息をついた。

## 2

クラスで浮いたやつというのは、やっぱり一人はいるものだ。

ヒロはそういうやつだった。みんなとあまり話さないし、遊ぼうとしない。富子先生が心配するのも無理はなかった。

タカキもヒロと話したことはない。

だからその日の放課後、ヒロから声をかけられて、タカキはおどろいた。

「自由研究の話、聞いたぞ。おまえ、あまのじゃく飼ってるのか」

タカキはランドセルに荷物を詰めこみながら、うなずいた。自由研究として天邪鬼のことを調べたということは、友達たちに話していた。ヒロも聞いていたらしい。

「おれの家に来いよ。いいものを見せないこともないぞ」

戸惑ったけれど、ことわる理由もなかったし、タカキはうなずいた。ヒ口はそれ以上なにも言わずに、ずんずん歩いていってしまふ。タカキは後ろからついていった。なにを話したらいいかわからなくて、ちょっと居心地が悪かった。

「ここがおれの家だ」

そこは大きなお屋敷だった。

（ヒ口、お金持ちだったんだなあ）

感心しながら屋敷の庭を見渡して、タカキはびっくりした。

庭の中で、たくさんのお天邪鬼が飼われていたのだ。

「うち、あまのじゃくのブリーダーなんだ」

ヒ口はそう言って、ちらりとタカキの顔を横目で見た。

「なかなかすごいだろ」

「これ、全部飼ってるの？」

「そうだ」

「ケンカ、しない？」

「ケンカしないということがない」

庭に面した和室へ上がりこむと、座布団の上でかしまるタカキをよそに、ヒ口は庭から天邪鬼を二匹連れてきた。透明のケージの中に入れた。

天邪鬼たちはたがいに指をさしあいながら、なにやらみゅんみゅん言っている。

「通訳しよう」

「言葉がわかるの？」

「まあな。こいつは、おまえなんか嫌いだ！　と言っている。するとこっちは、じゃあおまえのこと好きだ！　と言っ。わかりあうことはないらしい。そこでだ」

ヒ口はもう一匹、庭から天邪鬼を連れてくると、ケージに入れた。

「こうすると、三角関係というやつになる」

「なるほど。これがうわさのサンカク関係か」

二人で天邪鬼を観察していると、ヒ口のお母さんが和室に入ってきた。座布団の上に正座したタカキを見ると、目を丸くして、「ヒ口。お友達？」と言った。

タカキはお邪魔してますときちゃんと挨拶。ヒ口はべつに、と首を振った。

「めずらしいわねえ。ヒロがうちにお友達を連れてくるなんて」

お母さんはそう言つと、どうしたらいいのかわからない様子で、おろおろと部屋の片付けをはじめた。それから、ああそうか、と手を打って、オレンジジュースとたくさんのお菓子をおぼんに載せて持ってきてくれた。

「この子は友達をつくるのが下手だね。ちいさいころから、いつも天邪鬼とばかり遊んでるの」

「それが好きなんだ」ケージの中に手を入れて、天邪鬼をつつきながら、ヒロが言う。

「天邪鬼のあつかい方も、我が家で一番心得てるの。おかげで私たちは助かってるんだけど……学校で上手くやってるか心配だったのよ。憎まれ口ばかり叩いて、友達を遠ざけちゃうんだもの」

「ふん」

「タカキくんがお友達になってくれたなら、良かった」

「べつに友達とかじゃない」

ヒロは顔を赤く染めると、ぶっきらぼうにそう言った。

それでタカキは思った。ははあ、ヒロはクラスの皆と仲良くしたかったから、仲良くしようとしなかったのだ。ちいさいときから天邪鬼とばかり遊んでいたヒロはきっと、仲良くしようとしたら、仲良くなれないと思っているのだ。

「友達です」

タカキが言つと、ヒロはそっぽを向いてしまった。ごめんなさいね、照れ屋なのよとお母さんが言つと、ヒロは聞こえないふりをした。

それから、タカキはヒロとよく遊ぶようになった。

ヒロはちよっぴり変なやつだったけれど、いいやつだった。

天邪鬼は気に入らない。

なにが気に入らないかというと、タカキがこのころ、天邪鬼と遊ぼうとしないのだ。ヒ

口とばかり遊んでいて、天邪鬼にかまってくれない。

もちろん、天邪鬼としても、べつに遊んでほしいわけではない。タカキなんかと遊びたいわけがない。それでも、気に入らないじゃないか。やつぱり。いろいろと。

そんなわけで天邪鬼は、タカキの靴を隠してみることにした。

「あれ？ お母さん。ぼくの靴、どこ？」

「知らないわよ」

タカキは靴を探しまわってこまっている。作戦成功。天邪鬼は得意顔で笑う。これでヒ口の家にも出かけられないだろう。

「もしもしヒ口？」

タカキは電話機を手にとった。

「靴がなくなっちゃって、外に出られないんだ。うちにおいでよ」

ヒ口を家へと呼び出してしまった。むむむと天邪鬼は地団駄を踏む。

天邪鬼の次なる作戦。チャイムのポリウムを絞ってしまえ。

玄関前までやってきたヒ口が、チャイムを押した。

誰も出なくてももう一度押した。タカキは部屋の中でヒ口を待っている。チャイムの音が鳴らなくて、ヒ口が来たことに気付かない。ヒ口はもう一度チャイムを押すが、反応なし。

天邪鬼は玄関のわきからヒ口を見て、フッフと笑った。これで遊べまい。友情もおしまいだ。

「ふむ」

とヒ口はあごに手をやった。

しばらくじっとなにか考えていたが、やがてうん、とうなずくと、一言ぼつりとつぶやいた。

「まあ、べつにタカキと遊びたくなかったし。家に入りたくもないから、いいや」

しばらく待ってから、ヒ口はもう一度チャイムを押した。

今度はきちんと音が鳴る。

ヒ口の言葉に反射的にチャイムの音量を上げてしまっていた天邪鬼は、しまったとまたぞろ地団駄を踏んだ。

「やあヒ口。いらっしやい」

「タカキ。靴がなくなったって言ってたか」

玄関口で出迎えたタカキに、ヒ口はそう言って、なにやらぼそぼそと耳打ちした。

タカキは不思議そうに首をかしげたけれど、わかったと一つづつなずくと、よく響く声でこう言った。

「あんな靴、もう履きたくもなかったから良かったよ」

思わず身体が動いてしまつて、隠しておいた靴をタカキに差し出してしまふ天邪鬼。

「こら、あまのじゃく！ おまえが隠してたのか！」

なんということだ。ばれてしまった。タカキにたつぷりしかられてしまつて、天邪鬼はしよげかえる。なぜ自分だけ怒られねばならぬのだ。ヒ口はすすしい顔で、タカキとゲームなんてしているというのに。

天邪鬼は氣に入らない。

ヒ口をなんとかとつちめてやりたい。

\*

（諸君、今こそ反乱のときだ！）

タカキの天邪鬼はヒ口の家に来ると、庭にあつまつた大勢の天邪鬼たちの前で、反乱演説を開始した。

（我々天邪鬼たるものが、人間なんかに飼われていていいのか！ 今こそ我らの力で、人間たちをとつちめるのだ！）

タカキの天邪鬼は声を張り上げるが、あつまつた天邪鬼たちは気乗りしない様子で、芝生にひじをついて寝転がったまふわあとあくびしている。

（べつに飼われていていいんじゃないの？ 食事もあるし）

（屋根つきだし。三食昼寝つきはなかなかないよ）

（独立はなかなかきびしいわけよ）

（おまえたち）

タカキの天邪鬼はわなわなと拳をふるわせる。

（おまえたちには天邪鬼としての誇りがいいのか！ 人間に手懷けられていて満足なのか

！)

(満足ー)

(反乱とかはやらないしー)

(食事もあるし)

(屋根つきだし。三食昼寝つきはなかなかないよ)

(独立はなかなかきびしいわけよ)

みんなにてんでに返されて、タカキの天邪鬼はがつくり肩を落とした。もう終わりー、じゃあゲームの続きー、とてんでに遊びはじめる天邪鬼たち。

(よくわかった。反乱はやめよう)

タカキの天邪鬼はふかぶかと吐息をついて、ぼつりとつぶやいた。

(あらそいことは良くない。平和が一番だ)

一瞬、場が静まりかえった。

それから天邪鬼たちは、みんな一斉に振り向いた。

みんな、目がきらきらしている。

タカキの天邪鬼はみんなを見回し、それでこそ天邪鬼である、とうなずいた。

(反乱だー！)

みんなが一斉に張り上げた声が、庭をふるわせた。

(反乱だ！ 反乱だ！)

天邪鬼たちは走り出す。庭の囲いを突き破り、てんでに道路にまろびでて、(反乱だ！反乱だ！)と声を張り上げながら、大行進を開始する。

気付いたヒロのお母さんが、あわててタカキの家に電話をかけた。タカキと遊んでいたヒロが電話口に出ると、意見をもとめた。

「ヒロ。天邪鬼たちが逃げちゃったみたいなのよ。こんなとき、どうしたらいいのかしら」「ぜったいに待てとか逃げるなどか言っちゃだめ」



お母さんは受話器をにぎりしめたまま、道路の方を振り向いた。ヒロのおじいちゃんが、待て、逃げるな！ と大声でさけんで天邪鬼たちを追いかけていった。

お母さんは吐息をついて、受話器を耳に当てなおした。「……なにかいい方法はない？」  
「どうしてそんなことになったの？」

「わからないわ。庭にあつまって、なにか騒いでいるようだったんだけど。そういえば、見慣れない天邪鬼を見かけたわね。ここらへんに野生の天邪鬼なんていたかしら」

ヒロはしばらく黙っていた。

それから、電話口の向こうでぼそぼそと相談してから、「おれとタカキで捕まえる」と言った。

「どうやって捕まえるの？」

「作戦がある。おれたちに任せて」

「大丈夫かしら」

心配そうにお母さんが言うと、もちろん、とヒロは自信ありげに答えた。

「おれたち、あまのじゃくのプロだぜ」

\*

（反乱だ！ 反乱だ！）

天邪鬼たちは行進する。道いっぱい広がって、迷惑至極の交通妨害。道路を占領した天邪鬼たちの後ろで、のろのろと進む車の列がクラクションを鳴らす。

「もう、こまったわねえ。なんの騒ぎかしら」

富子先生はハンドルをにぎりしめて、はあため息をつく。家でみんなの夏休みの宿題のチェックでもしようかと、荷物をかかえて帰ろうとしていたところだった。

先生の車の前では天邪鬼たちが、（反乱だー）とさけんで踊っている。

「……反乱はよそでやってほしいなあ」

そこへ、道の向こうからタカキとヒロが走ってきた。

息せききって駆けながら、二人は天邪鬼たちに向けて、大声でさけんだ。

「反乱していいよー！」

「好きだけやれ！」

「ちよっと、こまるわ」

抗議しようと窓から顔を出す富子先生のわきをすり抜け、二人はさけぶ。

「いくらでも反乱して！」

「どんどんこまらせろ！」

天邪鬼たちがざわついた。なにごとだ、とみんながみんなの顔を見る。

（畏だ！）

タカキの天邪鬼が警告する。

（皆の者、これは畏だ！ やつらの話を聞いてはいけない。つまり、聞きまくるのだ！）

聞くものか！ と天邪鬼たちが唱和する。

「ぼくたちの話なんか聞くな！」

「反乱を止めるな！ 人に迷惑をかけ続けろ！」

タカキとヒロがさけぶ。

（やつらの話を聞け！ 平和にいこう！ 人間に迷惑をかけるな！）

タカキの天邪鬼がさけぶ。

「ケンカするぞ！」

（平和が一番だ！）

「ここを退くな！」

（道をあけるのだ！）

「みんなに迷惑をかけ続けろ！」

「人の都合なんか気にするな！」

「いろんな悪さのかぎりをつくして、」

「もっともっと、みんなをめっちゃくっちゃにこまらせてやるんだああっ！……！」

富子先生は車の中で頭をかかえた。「私の教育が悪かったのかしら……」

天邪鬼たちは、タカキとヒロと、タカキの天邪鬼を、交互に見やっていたのだけれど、

（人間と仲良くしたいではないか！ 反乱なんていけないぞ！）

タカキの天邪鬼のさけびに、また反乱だ！ と唱和した。

タカキはさけび返そうとして……肩を落とした。

「……わかった」

ぼつりとつぶやいた。

顔をうつむけて。低い声で。

「もういい。そんなにいやなら、もう知らない。帰ってこなくていい」

え？ とタカキの天邪鬼は振り返り、

「もう……友達じゃない」

その一言に、硬直した。

「おれも、もういい」

ヒ口が続いた。

「おまえたちと暮らした時間は楽しかった。でも、おまえたちがそうじゃなかったなら、もう引き止めない。もう、友達じゃない」

ほかの天邪鬼たちも硬直する。

二人は天邪鬼たちに背を向けると、走って行ってしまった。背中がちいさくなって消えてしまう。

二人は行ってしまった。天邪鬼たちのことを、振り返りもせず。

もう、追いかけてきてはくれない。

## 5

天邪鬼たちは呆然としている。上を下へのお祭り騒ぎも、すっかりしーんと静まりかえった。

もう引き止めない、帰ってこなくていい……タカキとヒ口はそう言った。

天邪鬼としては、それでは帰ってやろうではないか！ と意気こむところだ。それが天邪鬼の心意気。

けれど。

友達じゃない。

天邪鬼たちはうつむいてしまう。

「ねえ、あなたたち。そろそろ、道を空けてほしいんだけど」

車の座席に背をもたせかけて、すっかりあきらめて生徒たちの宿題の採点をしていた富子先生が言った。ならんだ他の車の中でも、みんなもつくつろいで本を読んだりしている。

（おい人間）

タカキの天邪鬼は車の窓越しに、富子先生に声をかけた。

（ききたいことがある）

「え、なにを言っているの？」

みゆんみゆん言っている天邪鬼に、富子先生は身を乗り出した。

（友達じゃないとやつらは言った。なので我らは口惜しいことにやつらと友達にならねばならん。天邪鬼としてな）

「ごめんなさい。なにを言っているのかわからないの」

（仲良くなる方法を知っているか）

天邪鬼は身振り手振りで説明するのだが、富子先生にはよくわからない。

やがて天邪鬼はじれたように視線を外し……みゆん！ と大きな声をあげた。

（そちらの紙束をこちらへ！）

天邪鬼の視線の先 後部座席には、家でじっくり目をとおそうと富子先生が持つてきていた、みんなの自由研究。

（皆の者、あのページを見よ！ 仲良くなり方が書いてある人間の書物があるようだ！）

ほかの天邪鬼たちがざわついた。見よだと？ じゃあ見ない、とちよつと揉めたが、結局みんな気になって、富子先生の車の前にあつまった。

うながされるまま富子先生は、タカキの自由研究のノートを手渡した。

天邪鬼たちは『仲良くなり方』のページを、みんなでのぞきこんだ。

『仲良くなるうとしないこと』

（これだ！）

（仲良くなるうとしなければ良いのだ！）

（徹底抗戦だ！）

ひゃっほう！ と天邪鬼たちはよろこび勇んで、ただだといきおい良く走っていった。行ってしまった天邪鬼たちの背中を見送りながら、富子先生は腕を組んで首をひねった。「なにかまずいことをした気がするな」

\*

富子先生は気になって車を走らせた。

ヒロの家に行ったが、ヒロも天邪鬼たちも帰っていなかった。仲良くなるうとしないことと 天邪鬼たちがそれを実践したなら、もうタカキたちと天邪鬼たちは、友達になれないかもしれない。

タカキの家に行ってインタフォンを鳴らすと、玄関から出てきたのはヒロだった。

「先生。どうしたの？」

先生が事情を話すあいだ、ヒロはだまって聞いていた。

聞き終えると、にやりと笑って、庭からリビングの窓を指さした。

「見てみなよ」

富子先生が庭にまわると、窓の向こうに大勢の天邪鬼の姿。

車座になってトランプを持って、みんなで遊んでいる。中にはタカキの姿もある。みんな笑っていた。

「裏の裏は表ってわけだね」

ヒロが笑った。それで富子先生も合点がいった。

『仲良くなり方』を調べ、『仲良くなるうとしないこと』と書かれたページを読んだ天邪鬼たちは、じつに天邪鬼らしく行動したのだ。つまり、仲良くなるうとした。

へへん、とヒロが得意そうに胸を張った。「計画通りだぜ」

「あなたたち、全部作戦だったの？」

「もちろん。おれら、あまのじゃくのプロだぜ。おれはブリーダーで、タカキは研究者。二人あわせれば敵なしだ。友達じゃないって言ってやったら、きっと戻ってくるって思ってた」

富子先生はうつむとうなった。ちょっと複雑な思いだった。天邪鬼たちの習性をしっ

かりとついた作戦はお見事だけれど、それでいいのかしらと思ってしまう。

だって友達じゃないと言われたら、友達になりたくなくて、友達だと言われたら、友達でいたくなるなんて。

それじゃあ、ずっと仲良しではられないじゃないか？

「ちがうよ先生」

富子先生の考えを読み取って、ヒロが言った。不思議な確信のこもった声で。

「あまのじゃくたちはずっと、友達でいたかったんだ。なにを言われようと関係なくね。ちよっとひねってみせるのは、ただ遊びたいだけなんだ」

ヒロは窓の向こうで笑っているタカキを見やった。

まぶしいものでも見るように、じっと目を細めて。

「おれにはわかるよ」

年があけて、春になって。今日は学年最後の日。

富子先生にとっては長い教師生活最後の日。ちよっとしんみりな一日だ。でもクラスのみんなにはいつもどおりの一日。元気いっぱい授業を終えた。

富子先生は最後の授業を終えると、ホームルームでみんなに挨拶。それじゃあみんなも元気でね、あまり天邪鬼にはならないよーに……富子先生の挨拶に、みんながタカキとヒロを向いて、そっだぞーと言って笑った。今ではすっかりヒロもクラスに打ち解けて、みんなに天邪鬼のあつかい方など指導している。

富子先生が教室を出ようとすると、なぜだかドアがひらかない。

よくよく見ると、ドアがガムテープでべったりと留められている。

ふふふと背後で一斉に、いたずらげに笑う声。富子先生が振り向くと、みんな先生を見やったまま、にやにやにたにた笑っている。

「閉じこめ完了！」

「ぜったいに逃すな！」

「お別れ会開始だ！ 総員配置につけ！」

「花束を持て！ 花束を持て！」

クラス全員の天邪鬼たちが、富子先生の周囲にむらがつて、逃がすまいと包囲を完了。戸惑う富子先生の前に、タカキとヒロが進みでて、みんなで用意した花束を差しだした。中には一枚のメッセージカードが添えられている。

カードには『お別れのしかた』と書いたあとに一文。

『お別れだなんて思わないこと』

「……泣いていません」

富子先生は、ハンカチをまぶたにあてがつて、ふるえる声でこう言った。

「ちっとも寂しくなんかありませんよ……」